大学生の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち

新見直子・松尾紗織・前田健一

Self-expression and expectation of expression from others in undergraduates' friendship

Naoko Niimi, Saori Mastuo, and Kenichi Maeda

本研究では，以下の3点について検討した．(1) 同性の友人に対する自己表明に性差があるか否か．(2) 対象者の性別と友人の性別の組み合わせによって自己表明や他者の表明を望む気持ちに違いがみられるか否か．(3) 本研究における大学生が先行研究における中学生や高校生よりも，同性の友人に対する自己表明や他者の表明を望む気持ちを高く示す傾向にあるか否か．分析の結果，次のことが明らかになった．(1) 男子は女子よりも「意見の表明」や「不満・要求の表明」を行うのに対して，女子は男子よりも「嬉しさや辛さの表明」を行う傾向にあった．(2) 自己表明の「嬉しさや辛さの表明」，「意見の表明」，「不満・要求の表明」では，同性の友人に対する得点が異性の友人に対する得点よりも有意に高かった．また，他者の表明を望む気持ちでは，4つの下位尺度のいずれにおいても，友人の性別に関わらず女子が男子よりも高い得点を示した．(3) 大学生は中学生や高校生よりも，同性の友人に対して，自己表明の「嬉しさや辛さの表明」や「意見の表明」，他者の表明を望む気持ちを高く示す傾向にあった．

キーワード：友人関係，自己表明，他者の表明を望む気持ち，大学生

問題と目的

青年期の発達課題として自己の形成があげられる．青年は，他者との相互作用を通して独自の価値観や信念を模索し，組織化することによって自己の形成を試みていると考えられる．特に，自分と同様の発達課題に直面している同世代の友人との相互作用は，青年の自己形成に大きな影響力をもつと考えられる．例えば，清水（1990）は，中学生，高校生，大学生を対象に依存対象について調査し，年齢の上昇に伴って依存対象が両親や先生から友人へと移行することを報告している．また，榎本（1987）は，大学生が親よりも友人に対して自己開示を行う傾向にあることを示している．これらの研究結果は，大学生にとって友人との相互作用が独自の価値観や信念を模索していくうえで重要であることを示唆している．しかし，大学生は友人との心理的距離をめぐる葛藤も抱えていることが指摘されている．藤井（2001）は，大学生を対象に友人関係における葛藤について検討し

た．その結果，友人との心理的距離が近くなりすぎることで自分が傷つくのではないかと思う者は相手との関係を壊そうとする傾向にあること，心理的距離が遠くなりすぎることで自分が寂しい思いをするのではないかと思う者は相手の言動に振り回される傾向にあることが明らかになった．つまり，大学生にとって重要な存在である友人と対等に相互作用を行うためには，適度な心理的距離を保つことが必要であると示唆される．

友人との適度な心理的距離を保つためには，自分の気持ちや考えを率直に伝えることや相手の気持ちや考えを受けとめることが必要である．柴橋（2001）は，中学生と高校生を対象に，同性の友人関係における自己表明（自分の気持ちや考えを率直に伝える）と他者の表明を望む気持ち（友人に率直に自分の気持ちや考えを言って欲しいと思う）について検討している．自己表明と他者の表明を望む気持ちの各４下位尺度得点について学校段階間で比較した結果，自己表明では，高校生が中学生よりも「嬉しさや辛さの表明」や「意見の表明」をする傾向にあった．しかし，「不満・要求の表明」や「断りの表明」に有意差はみられなかった．他者の表明を望む気持ちでは，高校生が中学生よりも「独自な意見の表明を望む気持ち」が高い傾向にあった．しかし，「相談・依頼を望む気持ち」，「率直な断りを望む気持ち」，「率直な抗議・注意を望む気持ち」に有意差はみられなかった．これらの結果は，中学から高校，大学へと学校段階が進むにつれて，自分の気持ちや意見を友人に対して率直に伝えようとする傾向や友人の意見を知りたいと思う傾向が強くなることを示している．おそらく，大学生になると，友人と親密なコミュニケーションを行う傾向が強くなり，それを通して互いの意見や感じ方の類似点や相違点を認識し，独自の価値観や信念を模索したり組織化するようになるからであろう．

ところで，中学生から大学生まで共通して，男子の友人関係では力・支配を重要視し，自立したつきあい方が多いのに対して，女子の友人関係では親密性や自己開示をもとに，積極的に分かり合おうとするつきあい方が多いと指摘されている（榎本，1999；落合・佐藤，1996）．先述した柴橋（2001）の研究でも，男子は女子よりも「友達のしていることに不満を感じたときはその気持ちを友だちに言う」などの「不満・要求の表明」をする傾向が強かった．それに対して，女子は男子よりも「辛いときや苦しいときはその気持ちを友達に伝える」などの「嬉しさや辛さの表明」をする傾向が強く，他者の表明を望む気持ちでは４下位尺度のすべてが強かった．同様の性差は，大学生の友人関係について検討した研究でも報告されている．例えば，和田（1993）は，友人に対する情動の自己開示と友人関係に望むものに関する性差を調査した．その結果，女子は男子よりも，抑鬱・不安，幸福の状態になった時に自己開示をする傾向にあり，何でも話してくれることを友人関係に望んでいた．この結果は，柴橋（2001）の「嬉しさや辛さの表明」や他者の意見を望む気持ちの４下位尺度にみられた性差の結果と類似している．さらに，崔・新井（1998）は，ネガティブな感情表出の制御に関する性差について調査した．その結果，男子は女子よりも友人から言語的被害を受けて怒りを感じている場面で，感情を制御しない傾向にあった．これは，柴橋（2001）の「不満・要求の表明」でみられた性差と類似した結果である．このように考えると，自己表明や他者の表明を望む気持ちが全体的に上昇すると考えられる大学生でも，同性の友人との付き合い方にみられる男子と女子の差は残存しているといえる．

大学生の友人関係では，同性の友人だけでなく異性の友人も重要な存在になる．中学生から大学生の依存対象について調査した清水（1990）は，大学生では異性の友人を依存対象とする者が多いことを示している．また，大学生を対象に異性の友人や恋人の有無について調査した松下（1992）によると，異性の友人や恋人がいないとする者は，全体の1割程度に過ぎないという．このように，大学生の友人関係では，異性の友人の数が増加し，異性の友人を重要な存在と認識することが特徴といえる．友人関係に関する研究は，同性同士の友人関係が男女間でどのように異なるのかについて調査したものが多いが，同性の友人や異性の友人との関係の両方を調査した研究もいくつか報告されている．例えば，Aukett, Ritchie, & Mill（1988）は，女子大学生が異性の友人よりも同性の友人と個人的な問題について話し合い，情緒的なサポートを得る傾向にあるのに対して，男子大学生が同性の友人よりも異性の友人と個人的な問題について話し合い，情緒的なサポートを得る傾向にあることを報告している．また，Parker & de Vries（1993）によると，女子大学生は同性の友人と異性の友人の両方に対して，同程度に友人の気持ちを汲み取り，友人の発言を親身になって聞くのに対して，男子大学生は同性の友人に対してそのような行為を行うことが相対的に少なかった．これらの研究結果は，少なくとも大学生では，対象者の性別だけでなく，友人の性別を組み合わせて，友人関係におけるコミュニケーションの特徴を調べる必要があることを示唆している．

そこで本研究では，対象者の性別と友人の性別を組み合わせて4群を構成し，自己表明や他者の表明を望む気持ちにおいて，群間にどのような違いがみられるかを検討する．本研究で予想される結果は，以下のとおりである．まず最初に同性の友人に対する「自己表明」の結果では，柴橋（2001）と同様に，女子が男子よりも「嬉しさや辛さの表明」を高く示すのに対して，男子が女子よりも「不満・要求の表明」を高く示すと予想される（予想1）．また，同性の友人に期待する「他者の表明を望む気持ち」についても，柴橋（2001）と同様に，女子が男子よりも「他者の表明を望む気持ち」の4下位尺度すべてにおいて高い得点を示すと予想される（予想2）．次に，対象者の性別と友人の性別を組み合わせた結果としては，次の2つの結果が予想される．第1に，Aukett et al.（1988）の研究から，女子の「自己表明」では同性の友人の場合が異性の友人の場合よりも高いのに対して，男子の「自己表明」では逆に異性の友人の場合が同性の友人の場合よりも高くなると予想される（予想3）．第2に，Parker & de Vries（1993）の研究から，女子の「他者の表明を望む気持ち」では同性の友人と異性の友人間に差はないが，男子の「他者の表明を望む気持ち」では異性の友人の場合が同性の友人の場合よりも高いと予想される（予想4）．最後に本研究では，中学，高校，大学へと学校段階が進むにつれて，自己表明や他者の表明を望む気持ちが強くなるか否かを確認するため，柴橋（2001）の中学生や高校生のデータと本研究の対象者である大学生のデータを比較する．

方　法

1. **対象者**　大学生128名（男子50名，女子78名）を調査対象とした．男子の平均年齢は20.86歳（SD=1.05），女子の平均年齢は20.56歳（SD=0.92）であった．

2. **測定尺度と得点化**　以下の2つの尺度を使用した．

①自己表明尺度　柴橋（2001）が作成した自己表明尺度を使用した（表 1）．この尺度は，「嬉しさや辛さの表明」（8 項目），「意見の表明」（7 項目），「不満・要求の表明」（6 項目），「断りの表明」（5 項目）の 4 下位尺度，26 項目から構成されていた．各項目内容が，同性の友人と異性の友人（恋人を除く）のそれぞれに対する自分の接し方にどの程度あてはまると思うかについて 4 段階で評定させた（まったくあてはまらない＝1 点，あまりあてはまらない＝2 点，ややあてはまる＝3 点，とてもあてはまる＝4 点）．異性の友人に対する自己表明と恋人に対する自己表明には違いがあると思われたため，異性の友人から恋人を除外して回答させた．各下位尺度得点は，1 項目あたりの平均得点を算出した（得点範囲：1 点～4 点）．各下位尺度得点が高いほど，それぞれの自己表明を行う傾向が強いことを示す．

②他者の表明を望む気持ち尺度　柴橋（2001）が作成した他者の表明を望む気持ち尺度を使用した（表 2）．この尺度は，「相談・依頼を望む気持ち」（5 項目），「率直な断りを望む気持ち」（4 項目），「率直な抗議・注意を望む気持ち」（5 項目），「独自な意見の表明を望む気持ち」（4 項目）の 4 下位

表1　自己表明尺度の質問項目

嬉しさや辛さの表明	**同性**: α=.80	**異性**: α=.78
8 友達に強く言いすぎて悪かったと思ったときはその気持ちを伝える		
17 どうしていいか分からないことがあって困ったときは友達に相談する		
11 友達に感謝しているときでも言葉にして表すことはない（R）		
15 辛いときや苦しいときはその気持ちを友達に伝える		
1 友達のしたことがいいなと思ったときはその気持ちを言葉で表す		
26 友達にほめられて嬉しいときはその気持ちを素直に表す		
6 面白いことや感動したことがあったとき友達にその気持ちを伝える		
20 一人ではできないようなことで困っているときは「手伝って」と友達に頼んでみる		
意見の表明	**同性**: α=.73	**異性**: α=.71
12 周りの友達にどう言われようと正しいと思うことは自分の信念を貫く		
10 友達に意見を求められたときは自分の考えをはっきり言う		
14 友達の考えに賛成できないとき「私はそうは思わない」とはっきり言う		
19 みんなと違う考えを持っていても言わずに周りに合わせる（R）		
2 友達と考え方が違うと思ったときでも話し合ったり議論しようとする		
23 周りに迷惑な行動をしている友達にははっきり注意する		
5 分担した仕事をしようとしない友達にははっきり注意する		
不満・要求の表明	**同性**: α=.74	**異性**: α=.69
13 友達に怒りや不満を感じたときでもその気持ちを表さないようにする（R）		
3 友達にからかわれて不愉快になっても怒ったりしない（R）		
25 友達の無神経な言い方で傷ついたときは自分の気持ちをはっきり言う		
7 友達のしていることに不満を感じたときはその気持ちを友達に言う		
21 友達の行動が自分にとって迷惑だと思うときはその友達に「やめて」と言う		
18 貸したものをいつまでも返してくれない友達には「返して」とはっきり言う		
断りの表明	**同性**: α=.54	**異性**: α=.51
16 友達に誘われたときは都合が悪くても断らない（R）		
22 友達から頼まれたことはやりたくないことでも断らない（R）		
4 友達に「遊びに行こう」と言われても一人でいたいときはそう言って断る		
24 友達にノートを貸してと頼まれても使う予定があるときはそう言って断る		
9 友達に頼まれたことがやってはいけないことだと思っても引き受ける（R）		

注：（R）は逆転項目を表す．

表2　他者の表明を望む気持ち尺度の質問項目

相談・依頼を望む気持ち	**同性**: α=.88　**異性**: α=.84
5 友達が辛いときや苦しいときは私にそう言って欲しいと思う	
18 私に迷惑がかかりそうなことでも困っているときは頼んでみて欲しいと思う	
15 一人でできないことで困っているときは「手伝って」と言って欲しいと思う	
2 友達にとって嬉しいことがあったときはその気持ちを伝えて欲しいと思う	
12 困っているときや何か手伝って欲しいことがあるときは言って欲しいと思う	
率直な断りを望む気持ち	**同性**: α=.69　**異性**: α=.71
10 私から頼まれたことができないときははっきりそう言って欲しいと思う	
8 私が誘ったときもし都合が悪ければ無理して付き合わないでそう言って断って欲しいと思う	
16 私が頼んだことでもやりたくないときははっきりそう言って欲しいと思う	
4 私が借りたものを返し忘れているときは「返して」と言って欲しいと思う	
率直な抗議・注意を望む気持ち	**同性**: α=.86　**異性**: α=.84
17 私が言った言葉で腹が立ったり不愉快になったときはそう言って欲しいと思う	
11 私がしたことで嫌な気持ちがしたときはそう言って欲しいと思う	
7 分担した仕事を私がしていないと思ったときはそう言って欲しいと思う	
1 私の行動が友達にとって迷惑なときはそう言って欲しいと思う	
13 私の無神経な言い方で傷ついたときはそう言って欲しいと思う	
独自な意見の表明を望む気持ち	**同性**: α=.75　**異性**: α=.77
9 私が友達に意見を求めたときは自分の考えをはっきり言って欲しいと思う	
14 私の意見に賛成できないと思ったときは自分の考えを言って欲しいと思う	
3 私と考え方が違うと友達が思っても話し合ったり議論して欲しいと思う	
6 周りの人と違った考えを持っているときは自分の考えを言って欲しいと思う	

尺度，18 項目から構成されていた．同性の友人と異性の友人（恋人を除く）のそれぞれに対して，各項目内容の行動で自分にどの程度接して欲しいと思うかについて，4 段階で評定させた（まったくあてはまらない＝1 点，あまりあてはまらない＝2 点，ややあてはまる＝3 点，とてもあてはまる＝4 点）．他者の表明を望む気持ちについても異性の友人と恋人の間に違いがあると思われたため，異性の友人から恋人を除外して回答させた．各下位尺度得点は，1 項目あたりの平均得点を算出した（得点範囲：1 点～4 点）．各下位尺度得点が高いほど，それぞれの他者の表明を望む気持ちが強いことを示す．

なお，恋人のいる者といない者の間で，異性の友人に対する自己表明や表明を望む気持ちに違いがみられることも考えられるので，恋人の有無について回答させた．その結果，恋人がいると回答した者は，46 名（男子 21 名，女子 25 名）であった．

3. 実施時期と手続き　2004 年 11 月中旬に，講義時間の一部を利用して集団で実施した．所要時間は約 15 分であった．

結　果

1. 分散分析

異性の友人の場合には，自己表明や他者の表明を望む気持ちに恋人の有無による違いがあるか否かを検討するため，自己表明と他者の表明を望む気持ちの各 4 下位尺度得点別に恋人の有無間で t

検定を行った．その結果，「率直な断りを望む気持ち」で有意となり（t（126）=1.99, p<.05），恋人のいる者（M =3.71）が恋人のいない者（M =3.56）よりも有意に高かった．しかし，それ以外の7つの下位尺度得点では有意差はみられなかった．したがって，以下の分析では恋人のいる者と恋人のいない者を一括して扱うことにした．

①自己表明　表3に示す平均得点に基づいて2（対象者の性別：男子，女子）×2（友人の性別：同性，異性）の分散分析を行った．また，以下の単純主効果の検定では Ryan 法を使用し，有意水準はすべて p<.05 であった．

「嬉しさや辛さの表明」では，対象者の性別の主効果が F（1，126）=3.76，p<.10 で有意傾向を示し，女子（M =3.22）が男子（M =3.07）よりも高い傾向にあった．また，友人の性別の主効果が F（1，126）=53.88，p<.001 で有意となり，同性の友人に対する「嬉しさや辛さの表明」（M =3.26）が異性の友人に対する「嬉しさや辛さの表明」（M =3.03）よりも有意に高かった．さらに，対象者の性別と友人の性別の交互作用が F（1，126）=9.12，p<.005 で有意となった．単純主効果の検定を行ったところ，男女ともに同性の友人に対する「嬉しさや辛さの表明」が異性の友人に対する「嬉しさや辛さの表明」よりも有意に高かった．加えて，同性の友人に対する「嬉しさや辛さの表明」では，女子が男子よりも有意に高かった．

「意見の表明」では，友人の性別の主効果が F（1，126）=5.96，p<.05 で有意となり，同性の友人に対する「意見の表明」（M =2.89）が異性の友人に対する「意見の表明」（M =2.82）よりも有意に高かった．また，対象者の性別と友人の性別の交互作用が F（1，126）=13.86，p<.001 で有意となった．単純主効果の検定を行ったところ，男子では同性の友人に対する「意見の表明」が異性の友人に対する「意見の表明」よりも有意に高かった．加えて，同性の友人に対する「意見の表明」では，男子が女子よりも有意に高かった．

「不満・要求の表明」では，友人の性別の主効果が F（1，126）=3.20，p<.10 で有意傾向を示し，同性の友人に対する「不満・要求の表明」（M =2.60）が異性の友人に対する「不満・要求の表明」（M =2.53）よりも高い傾向にあった．また，対象者の性別と友人の性別の交互作用が F（1，126）=16.20，p<.001 で有意となった．単純主効果の検定を行ったところ，男子では同性の友人に対する「不満・要求の表明」が異性の友人に対する「不満・要求の表明」よりも有意に高かった．加えて，同性の友人に対する「不満・要求の表明」では，男子が女子よりも有意に高かった．

「断りの表明」では，対象者の性別と友人の性別の交互作用が F（1，126）=12.84，p<.001 で有

表3　自己表明の各下位尺度得点（SD）

		同性	異性
嬉しさや辛さの表明	男子	3.14 (0.43)	3.03 (0.44)
	女子	3.39 (0.43)	3.07 (0.53)
意見の表明	男子	2.97 (0.43)	2.81 (0.44)
	女子	2.81 (0.44)	2.84 (0.46)
不満・要求の表明	男子	2.74 (0.45)	2.52 (0.44)
	女子	2.46 (0.52)	2.54 (0.53)
断りの表明	男子	3.01 (0.51)	2.93 (0.52)
	女子	2.90 (0.43)	3.03 (0.40)

意となった．単純主効果の検定を行ったところ，男子では同性の友人に対する「断りの表明」が異性の友人に対する「断りの表明」よりも高い傾向にあった．女子では，異性の友人に対する「断りの表明」が同性の友人に対する「断りの表明」よりも有意に高かった．

②他者の表明を望む気持ち　表4に示す平均得点に基づいて2（対象者の性別：男子，女子）×2（友人の性別：同性，異性）の分散分析を行った．また，以下の単純主効果の検定では Ryan 法を使用し，有意水準はすべて $p<.05$ であった．

「相談・依頼を望む気持ち」では，対象者の性別の主効果が F（1，126）=13.49，$p<.001$ で有意となり，女子（M=3.66）が男子（M=3.30）よりも有意に高かった．また，友人の性別の主効果が F（1，126）=7.63，$p<.01$ で有意となり，同性の友人に対する「相談・依頼を望む気持ち」（M=3.51）が異性の友人に対する「相談・依頼を望む気持ち」（M=3.45）よりも有意に高かった．

「率直な断りを望む気持ち」では，対象者の性別の主効果が F（1，126）=12.13，$p<.001$ で有意となり，女子（M=3.71）が男子（M=3.47）よりも有意に高かった．

「率直な抗議・注意を望む気持ち」では，対象者の性別の主効果が F（1，126）=5.59，$p<.05$ で有意となり，女子（M=3.62）が男子（M=3.41）よりも有意に高かった．

「独自な意見の表明を望む気持ち」では，対象者の性別の主効果が F（1，126）=16.28，$p<.001$ で有意となり，女子（M=3.66）が男子（M=3.32）よりも有意に高かった．

表4　他者の表明を望む気持ちの各下位尺度得点（SD）

		同性	異性
相談・依頼を望む	男子	3.32 (0.63)	3.29 (0.64)
	女子	3.70 (0.46)	3.62 (0.47)
率直な断りを望む	男子	3.48 (0.41)	3.47 (0.45)
	女子	3.72 (0.35)	3.71 (0.36)
抗議・注意を望む	男子	3.41 (0.54)	3.42 (0.54)
	女子	3.62 (0.44)	3.62 (0.44)
独自な意見を望む	男子	3.34 (0.54)	3.31 (0.56)
	女子	3.66 (0.41)	3.67 (0.41)

2. 学校段階間の比較

自己表明と他者の表明を望む気持ちの各下位尺度について，本研究で得られた大学生のデータと

表5　学校段階別の自己表明の各下位尺度得点（SD）

	中学（n=327）		高校（n=404）		大学（n=128）	
	男子（n=197）	女子（n=130）	男子（n=245）	女子（n=159）	男子（n=50）	女子（n=78）
嬉しさや辛さの表明	2.72 (0.54)	3.10 (0.48)	2.84 (0.50)	3.20 (0.49)	3.14 (0.43)	3.39 (0.43)
意見の表明	2.50 (0.52)	2.51 (0.49)	2.72 (0.49)	2.63 (0.56)	2.97 (0.43)	2.81 (0.44)
不満・要求の表明	2.75 (0.52)	2.49 (0.46)	2.69 (0.53)	2.52 (0.54)	2.74 (0.45)	2.46 (0.52)
断りの表明	3.03 (0.51)	2.92 (0.51)	2.95 (0.58)	3.05 (0.51)	3.01 (0.51)	2.90 (0.43)

注：中学生と高校生の下位尺度得点およびSDは，柴橋（2001）のデータを引用した．

柴橋（2001）の中学生，高校生のデータに基づいて表5と表6を作成した．

①自己表明　表5から，大学生は男女ともに中学生や高校生よりも「嬉しさや辛さの表明」と「意見の表明」を高く示す傾向にあった．それに対して，「不満・要求の表明」と「断りの表明」では，ほとんど学校段階間で得点の変化はみられなかった．

②他者の表明を望む気持ち　表6から，大学生は男女ともに中学生や高校生よりもすべての下位尺度得点が増加する傾向にあった．

表6　学校段階別の他者の表明を望む気持ちの各下位尺度得点（*SD*）

	中学（*n*=327）		高校（*n*=404）		大学（*n*=128）	
	男子（*n*=197）	女子（*n*=130）	男子（*n*=245）	女子（*n*=159）	男子（*n*=50）	女子（*n*=78）
相談・依頼を望む	2.93 (0.72)	3.46 (0.52)	3.07 (0.65)	3.42 (0.62)	3.32 (0.63)	3.70 (0.46)
率直な断りを望む	3.25 (0.67)	3.61 (0.44)	3.28 (0.63)	3.58 (0.49)	3.48 (0.41)	3.72 (0.35)
抗議・注意を望む	3.08 (0.68)	3.47 (0.51)	3.20 (0.64)	3.46 (0.57)	3.41 (0.54)	3.62 (0.44)
独自な意見を望む	2.99 (0.66)	3.29 (0.53)	3.26 (0.59)	3.46 0.54)	3.34 (0.54)	3.66 (0.41)

注：中学生と高校生の下位尺度得点および*SD*は，柴橋（2001）のデータを引用した．

考　察

本研究では，大学生の性別と友人の性別を組み合わせて4群を構成し，自己表明と他者の表明を望む気持ちの各下位尺度得点別に群間比較を行い，4つの予想を検証することを主な目的とした．分散分析の結果，同性の友人に対する「嬉しさや辛さの表明」では女子が男子よりも高い得点を示し，同性の友人に対する「不満・要求の表明」では逆に男子が女子よりも高い得点を示した．この結果は，本研究の予想1を確証するものであり，中学生や高校生を対象にした柴橋（2001）の結果と一致するものである．柴橋（2001）の結果と異なる点は，本研究の大学生では同性の友人に対する「意見の表明」においても，「不満・要求の表明」の場合と同様に，男子が女子よりも高い得点を示したことである．柴橋（2001）では高校生が中学生よりも「意見の表明」をする傾向にあったことを考慮すると，大学生における意見の表明の性差は，大学生が中学生や高校生よりも意見の表明をする傾向が高まるという発達差を反映しているのかもしれない．中学生や高校生では自分の不利益や立場を守るために不満や要求を相手に伝えることはあっても，自分の意見や考えをはっきりと相手に言うことは少ないのであろう．意見の表明の場合には，相手の友人も自分と同じ意見や考えを持っているとは限らないので，場合によっては言い争いや激しい議論に発展したり，意見の食い違いや考え方の平行線を修正できない事態も生じるからである．それに対して，大学生になると，個人の意見や考えを尊重する傾向が強くなり，たとえ相手の友人と異なる意見であっても自分の意見をはっきりと主張できるようになるのであろう．あるいは，大学生になると，所属集団や準拠集団が複数化するので，高校までの学級集団のように特定の集団内で特定の友人関係に配慮しながら，自分の意見や考えを抑制する必要がなくなるからかもしれない．興味深いことに，大学生における自己表明の性差は，同性の友人に対する場合にはみられたが，異性の友人に対する場合にはまった

くみられなかった．男子大学生も，同性友人に対しては自分の意見や考えを主張できても，異性の友人に対しては女子と同様に自己表明に気を使っているようである．

次に，表４の結果から分かるように，「他者の表明を望む気持ち」の４下位尺度すべてにおいて，女子が男子よりも高い得点を示した．この結果は，本研究の予想２を確証するものであり，柴橋（2001）の中学生や高校生の結果と一致するものである．女子は男子よりも，自分から「意見の表明」や「不満・要求の表明」をすることは少ないが，同性の友人からは「意見の表明」や「不満・要求の表明」をも含めて何でも話してもらいたいと望んでいることが分かる．

本研究の予想３では，女子の「自己表明」では同性の友人の場合が異性の友人の場合よりも高いのに対して，男子の「自己表明」では逆に異性の友人の場合が同性の友人の場合よりも高くなると予想した．しかし，自己表明の４下位尺度得点の分析結果は，すべて予想３と異なる結果であった．「嬉しさや辛さの表明」では男子も女子も共通して，同性の友人の場合が異性の友人の場合よりも高かった．女子の結果は予想３と一致するが，男子の結果は予想３と一致しない．「意見の表明」や「不満・要求の表明」では，「嬉しさや辛さの表明」と同様に，男子において同性の友人の場合が異性の友人の場合よりも高かった．また，女子では同性の友人と異性の友人間に差がなかった．最も予想と異なるのは，「断りの表明」の結果である．「断りの表明」では，男子では同性の友人の場合が異性の友人の場合よりも高いのに対して，女子では逆に異性の友人の場合が同性の友人の場合よりも高かった．これらの結果から，男子大学生は同性の友人に対して４下位尺度すべての自己表明をするが，女子大学生は自己表明の内容によって同性の友人に表明するか，異性の友人に表明するかを調整していることが分かる．

和田（1996）によると，男子は女子よりも同性の友人関係において「何かにつけ，一緒に行動できる」などの共行動を重視する傾向にあるという．また，榎本（2000）は，高校生や大学生の男子が女子よりも「友達には私の趣味や好みと一致していてほしい」などの同調欲求を強く示す傾向にあることを報告している．これらの結果は，男子の大学生が同性の友人関係の中で同じ行動や趣味を共有して楽しめることを重視していることを示唆する．男子は女子よりも，行動や趣味に対する互いの意見や考えを確認し合うために，同性の友人に対して自己表明するのかもしれない．

興味深い結果は，「断りの表明」の結果であった．予想３に反して，女子では異性の友人に対する表明が同性の友人に対する表明よりも高かった．要するに，男子は男性の友人に対して断りやすいが，女子も男性の友人に対する方が断りやすいという結果であった．断られるのは，いずれも男性という点で共通している．本研究で使用した「断りの表明」の項目は，「友達に誘われたときは都合が悪くても断らない（逆転項目）」や「友達に『遊びに行こう』と言われても一人でいたいときはそう言って断る」など，友人に誘われたり頼まれた行動をしたくないと友人に表明するものであった．大学生は全般に「友達には私の意見をきちんと言いたい」という相互尊重の傾向が高い（榎本，2000）ことから，都合の悪いときまで無理して友人に合わせなくてもよいと考えていると思われる．女子は同性の友人からの誘いや依頼を断った場合，友人関係を壊してしまうのではないかという不安が生じ，断りにくいと感じるのかもしれない．その点，異性の友人関係の場合には，互いに性別が異なることを前提として付き合っているので，断りの表明が友人関係の崩壊に直結することを心配す

る必要がないのかもしれない.

なお，本研究の予想４については，いずれの下位尺度でも交互作用が有意でなく，予想４と一致する結果はみられなかった. 本研究は，大学生を対象にしたことによって，同性の友人だけでなく，異性の友人についても検討し，柴橋（2001）の研究を一歩前進させるところに特色があった．しかし，「他者の表明を望む気持ち」に関する限り，女子が男子よりも高いものの，大学生は全般的に同性の友人と異性の友人に関係なく，何でも友人から表明してもらいたいと望む傾向に変わりないといえる.

最後に，学校段階が進むにつれて，自己表明や他者の表明を望む気持ちが高まるか否かを検討するため，柴橋（2001）の中学生や高校生のデータと本研究の大学生のデータを単純に比較した．その結果，自己表明の「嬉しさや辛さの表明」と「意見の表明」では男女ともに大学生が中学生や高校生よりも高い得点を示したのに対して，「不満・要求の表明」と「断りの表明」では３つの学校段階間にほとんど変化はみられなかった. 少なくとも，中学，高校，大学と年齢が上昇するにつれて，友人に対する「嬉しさや辛さの表明」と「意見の表明」は高まっていくといえる．また，他者の表明を望む気持ちでは，４下位尺度すべてにおいて大学生が中学生や高校生よりも高い値を示した. 柴橋（2001）では，「独自な意見の表明を望む気持ち」で中学生と高校生の間に差がみられたが，他の３下位尺度では有意差はみられていない．大学生になると，中学生や高校生よりも，他者から何でも表明してもらいたいという気持ちが強くなるといえる．これらの学校段階の相違から，大学生は中学生や高校生よりも，自他の相違を踏まえて友人との適度な心理的距離を保ちながら，自己表明や他者からの表明を求めて親密なコミュニケーションを行い，自己を形成していると考えられる.

引用文献

Aukett, R., Ritchie, J., & Mill, K. 1988 Gender differences in friendship patterns. *Sex Roles*, **19**, 57-66.

崔　京姫・新井邦二郎 1998 ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係 教育心理学研究, **46**, 432-441.

榎本博明 1987 青年期（大学生）における自己開示性とその性差について 心理学研究, **58**, 91-97.

榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化 教育心理学研究, **47**, 180-190.

榎本敦子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453.

藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, **49**, 146-155.

松下美知子 1992 人間関係の展開 藤原喜悦（編） 青年期の発達と学習 pp.51-68. 学芸図書

落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究, **44**, 55-65.

Parker, S., & de Vries, B. 1993 Patterns of friendship for women and men in same and cross-sex relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **10**, 617-626.

柴橋祐子 2001 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, **12**,

123-134.
清水弘司 1990 異性のともだち こころの科学, **32**, 66-69.
和田　実 1993 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, **8**, 67-75.
和田　実 1996 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, **67**, 232-237.

付記

本研究は，第２著者が広島大学に提出した卒業論文(平成 16 年度)の一部を修正したものです．本論文を作成するにあたり調査に協力していただいた大学生の皆さんに，心から感謝の意を表します．